

師、天長十年四十にて身つかれ眼くらし、命久しかるまじと思ひ、叡山の北谷に草庵をむすび、三年つとめ行ひて、おわりをまたれければ、ある夜夢に、天人來りたり、これ靈藥なりとてあつ、其形瓜に似たり、半片を食す、其味蜜の如し、人ありて告るやう、これ梵天王の妙藥なりと、夢さめて口中餘味あり、しかして後やせたるかたち更にすぐやかに、くらきまなじります、明らかなり、その半片を土にまきければ、全き瓜の生せしいまの梵天これなり、元亨釋書に見えたり、附會

の說なり、釋書には有、一人告曰、是切利天妙藥也云々、羸形更健、昏眸益明、於是、以石墨草筆、書妙法華云々、この以下彼の半片の瓜の事なし、そのうへ切利天と梵天とは異なり、ほでん瓜の名によりて、かゝることを、瓜を六かは半にむくといふも、久き事にや、五元集に、あたまから章魚になりける六皮半、

〔古事記中〕爾其熊曾建、自信然也、於西方除吾二人、無建強人、然於大倭國、益吾二人、而建男者坐禪理、是以吾獻御名、自今以後、應稱倭建御子、是事白訖、即如熟瓜、振折○折恐而殺、

〔古事記傳 二十七〕熟瓜、ハ本叙知ホゾチと訓略和名抄に熟瓜、和名保曾知、或說極熟蒂落之義也、とあり、甚く熟て、おのづから蒂より絶て落たる由の名なり、中略さて熟瓜は、保曾知字理と云へきを、字理なば省きて云は此例常に多し、

〔元亨釋書二〕慧解、釋善珠、姓安部氏、京兆人、或曰、太皇后藤宮子之藁子也、少魯鈍、而以此爲耻、學唯識宗、習因明論、昏窒不通、勵志無撓、時毒暑、頭腫如熟瓜、鬢髮盡落、珠之勤業、率類之、以故博該、三歲、延曆十六年正月、侍皇太子病、事在資治表、其年四月化、歲七十五、

〔大槐秘抄〕村上の御日記に、蜜瓜のたねを鴻臚館のあづかりに給ひて、鴻臚にうへさせられたりとこそ候めれ、おほやけはよき瓜うへさせて、きこしめしけるにこそ候めれ、

〔玉造小町子壯衰書〕又集神嶺之美果、聚靈澤之味菜、東門五色之瓜、西窓七班之茄、オサヒ

〔雲州消息下末〕桂邊有領地、尋邵平之跡、令殖五色之瓜、而隣子村男、每夜掠之、令條所、指准盜論、歟已乖不納履之儀、兼仰里長、可加制止、彼邊散所、雜色多以居止、可被仰案内也、謹言、